

おおくぼむらあらかわづつみせっしょえず 大久保村荒川堤切所絵図

1846年（弘化3年）6月の大洪水の際、荒川の堤防が武蔵国入間郡大久保村（埼玉県富士見市東大久保）の東側で決壊し、大量の土砂が流入した。これにより、村内の田畑は大きな被害を受け、復興には莫大な資金と沢山の人手が必要となった。そこで、大久保村の名主は、入間郡を治める川越藩から復興資金を貰うため、1848年（嘉永元年）4月に被害状況の絵図を作成し、同年6月、堤防修復に関する請書（「御請書控」大澤家文書）と共に、川越藩に提出したと考えられる。

当時の洪水被害の状況を知る記録が、近隣の村々に残っている。大久保村の南方にある宗岡村（埼玉県志木市宗岡）の文書には、「6月16日から長雨が降り続き荒川・新河岸川・柳瀬川が満水になっている。」と書かれている。東部に荒川、西部に新河岸川・柳瀬川の合流地点である宗岡村も堤防が決壊し、大久保村と同様に甚大な被害を受けた。

一方、大久保村の北隣にある福岡新田（埼玉県ふじみ野市）の『大水記録帳』（柳川家文書）には、「5月27日より雷があり、7月9日の朝まで長雨が続き、洪水が起こった。6月29日の午前4時頃、大久保村の堤防が決壊し、田畑が8町程（約8ヘクタール）冠水して、1軒の家が浸水した。」と書かれており、大久保村の被害の状況を詳細に記録している。

川越藩主松平大和守から江戸幕府に提出された被害の報告書（『弘化雑記』第八冊）では、「入間郡内にある荒川の大久保村大囲堤が長さ40間（約730メートル）、宗岡村の堤防が17間（約310メートル）決壊し、水が逆流した結果、上流の村々にも多くの被害が出た。」と書かれている。つまり、この大洪水は、現在の埼玉県川越市・ふじみ野市・富士見市・志木市に渡る地域に甚大な被害を及ぼしたのだ。

その後、被害を受けた村々は、復興と人民の救済を行っていく。村々は、川越藩に救済の手当て

をお願いした。さらに、大久保村の名主等は、被害者に対し自分の家で貯えていた米を炊き出すなどの救済にあたり、後に藩から恩賞を得ている。

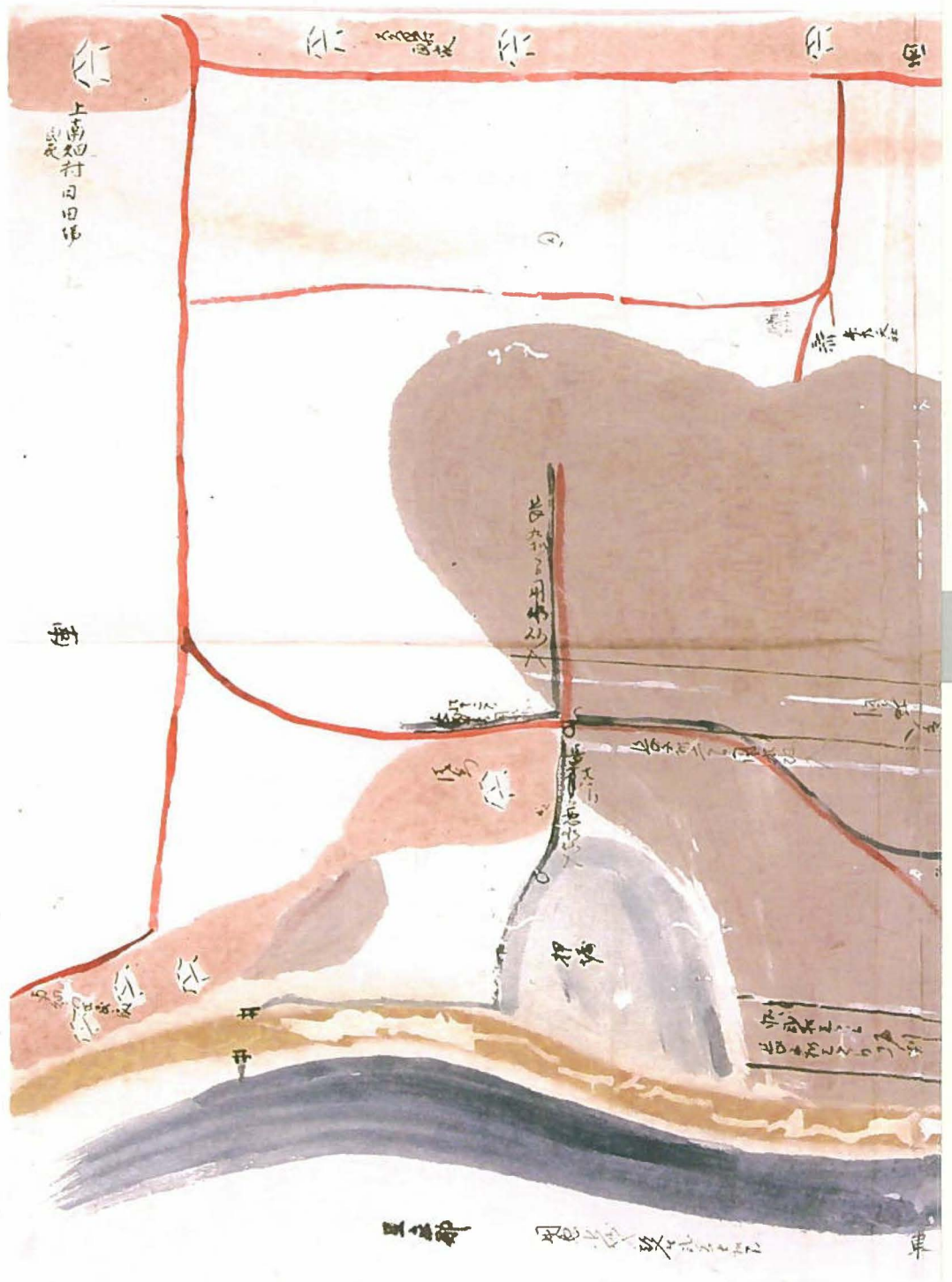
1847年（弘化4年）になると村々は藩に対し復旧要請を行い、土木工事に着手して行く。しかしながら、大久保村は、1年分の年貢を減免してもらおう一方で、被害から2年経過した1848年になっても復興の目途が立たなかった。そのため、川越藩に検査してもらい復興を願い出たのだった。この工事にかかった費用は64両、人手は3万8千人にも及んだという。

1846年（弘化3年）の大洪水は、いかにして生じたのであろうか。その原因に江戸幕府の治水対策があげられる。元来、荒川は利根川と合流し、埼玉県東部低地と江戸に水害をもたらしていた。幕府は、その被害を和らげるため、1629年～1634年（寛永6年～11年）の間に荒川を入間川に付け替える工事を行ったのである。その結果、埼玉県東部低地をはじめ下流域である江戸の水害は減少し、新田開発が進んだ。しかし、元の入間川流域は、従来の入間川の水量に荒川の水量が加わったため、頻繁に大規模な水害を受けることとなった。江戸時代後期になると幕府の財政難のため、治水・河川管理政策は後退し、江戸時代前期～中期の江戸城下を中心とした治水対策の結果、荒川流域での洪水が増大していった。つまり、江戸時代後期に荒川流域でおきた洪水は、自然災害に見えたが、実は人災だったのである。

【参考文献】

井田実「弘化三年の大洪水について」『郷土志木』（第14号）1985 上福岡市教育委員会『水害資料集成』1996 埼玉県『荒川』（人文1）1987 志木市教育委員会『水害と志木』1988 富士見市立難波田城資料館『富士見の村絵図』2005 宮原一郎「4堤防、決壊す」『よくわかる古文書教室』2008

石塚 宏明（富士見市立難波田城資料館）



大久保村荒川堤切所絵図／富士見市立難波田城資料館蔵

273
2024
10/11



無名
不名
不名
不名
不名

嘉來
不名

此

嘉來
不名
不名
不名
不名

- 嘉來
- 不名
- 不名
- 不名
- 不名
- 不名
- 不名
- △ 不名

嘉來
不名

嘉來

嘉來
不名

嘉來
不名

嘉來
不名